

---

# Winter Fall

八月一日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Winter Fall

### 【Nコード】

N69660

### 【作者名】

八月一日

### 【あらすじ】

寒々とした冬。それは部屋の中でも容赦なく。

温もりを求めてよってきた妹の相手やら、料理やら。

W i n t e r      F a l l

八月一日

また、この季節がやってきた。先週末ではなにもかもが秋模様で、肺に取り込む空気ですえ秋の味がしていたのに。

けれどそれは先週末まで。今となつては全てが冬模様。手足の先がかじかんで、吸い込んだ空気が胸に冷たい。空気を吸うたびに、風に吹かれるたびに、どんよりとした空を見るたびに、なんだか気が滅入ってしまう。毎年の事とはいえ、やっぱり冬は苦手だ。嫌いではないけど、好きでもないから、苦手。

冬の空気を吸うたびに、どこか感傷的になつて胸ぽっかりと穴があいていく感じになる。別に冬になにかあつたわけじゃないけど。

先週を秋終りとしたら、今週は冬初め。底冷えはどんどん進んでいって、息をするたびに肺が冷えて、こきざみに震えだすんだろう。そんなことをぼーっと考えながら、のろのろとした足取りで、家

に向かう。

玄関の鍵を開けて、2階の自室に向かう階段を上る。

家に入ってもどこか冬の気配を感じる。こうなったら、この気配になれるまでは違和感は消えない。

鞆を机に置いて、着替えるべく制服を脱ぐ。さらされた地肌に寒気を感じながら私服に着替えて、しわのつかないように制服をハンガーにかけてベッドに倒れ込む。いつのまにかベッドも冬使用にかえられていた。妹の<sup>まい</sup>莓の仕業だろうか。だとしてもその妹はどこにいるのやら。

「はあ………」

仰向けになって溜息をつく。かといって何かかわるわけじゃないけど。

「とりゃ」

「……重い」

部屋の扉を開ける音がしたと思ったら、案の定妹が乗っかってきた。人が仰向けになるたびに乗っかってくるにはどうにかならぬものか。

「<sup>みつき</sup>皋月ねえ温かい」

人に乗っかってそんなことをいつてくる<sup>莓</sup>は、胸元に顔をうずめるようにして、がっちりと抱きついてくる。

「<sup>莓</sup>の方が温かいんだけど」

私はどちらかといえば放熱がうまくできてない方。<sup>莓</sup>はどんどん放熱してるから自分が温いって気付いてないのかもしれない。放熱

がうまくできてない私は、熱がこもって自己体温でたまにくらくらする。

「んふふ〜人肌ー」

こうなると引きはがそうが何をしようが、莓は離れない。莓が満足するまですつとこのまま。

「ねえねえ、胸おつきいと寒くないの？」

「胸の大きさなんて関係ない」

それだと世の中のグラビアの人らは冬に強いことになる。

「毎年この時期になると抱きついてくるけど、暖房使えば？」

この時期、というより頻度が跳ね上がる。

「人肌がいいのー」

莓のこの感覚がわからない。暖房の方が格段に効率もいいのに。

「それに、お菓子作ってるから甘い匂いするし」

趣味の一つ、と思って始めたことだけど、菓子特有の甘い匂いがどうも染みついたのか、莓の言うとおり、すこし甘い匂いがする。友達にも香水のブランド名をたまに聞かれるけど、香水じゃないしね。

「温かいし、甘い匂いするし……なんか眠くなってきたかも」

「毎回いつてるけど、自分の部屋で寝なさい」

このやりとりはいつも無駄に終わる。莓がかならずこのまま寝るから。

「臯月ねえ……大好き」

「莓、何言って……もう寝てる」

人の体温で眠くなるって、赤ん坊じゃないんだから。

これも毎度いつもの事。乗っかってる莓をどかして、私のベッドに寝かせる。

「はあ」

これまた幸せそうな寝顔で。

莓が抱きついていたせいか体が妙に温い。放熱せずに貯め込む私にはすこしばかし温くすぎる。

溜まつた体温を抜くべく、リビングに降りる。冷えた麦茶でも飲めばそれなりに下がるだろうから。

「シュークリーム……」

テーブルの上には莓が読んでそのままにしたらしき本があった。

その本はシュークリームのページを開いたまま。

「久々に作ろうかな」

ラックの材料を確認して、頭の中からメニューを引き取り出して

材料を準備。

「さて、と」

苺が起きてくるころ合いには、出来てるかな。

「シュークリーム作るのってけっこう久しぶりかな」

よくよく考えれば、苺にねだられたのがきつかけだっけ、菓子作り。

作り方を思い出しながら、シュークリームを作っていく。オーブンで生地を焼いている間に、カスタードを作るも、カスタードともなると、甘ったるい匂いが漂いだす。香水とも取られるこの匂いは、随分染みついていよう。さっきの苺みたいにいい匂いとかいわれる。

焼きあがった生地にカスタードを入れて、完成。若干、バニラの風味が強い出来になったけど、まあ手作りならではだし。

「あ、シュークリーム」

予定通り、苺が起きてくるころ合いには完成したみたい。

「はい、出来立て」

皿に乗せた6個を苺に渡して、私は後片付け。

「臯月ねえも一緒に食べよう」

「はいはい」

頬張ってる莓の表情からして、上々の出来。

「ん〜おいしい」

「クリームついてる」

片づけといってもまとめておいた「ゴミ」を捨てるだけ。

「ん」

「はいはい」

さしだされたカスタードが口元についた顔から、カスタードをすくいとって、莓の口に突っ込む。

「臯月ねえひどい」

「しっかり舐めとってるじゃない」

突っ込んだ指には確かに、莓がカスタードを舐めとっていく舌が這った感触がある。

「だって甘いんだもん」

「それはまた随分と不純な動機で」

シュークリームを一つ手にとって口に運ぶ。うん、中々の出来。生地はもう少しサクサクさせたほうがよかったかな。

「いいもーんだ」

マイは残りのシュークリームを口に運んだ。相変わらずおいしそうに食べる。

「ねえ、臯月ねえ」

「ん？」

「大好き！」

「はいはい」

「臯月ねえ、一緒にねよー」

「……莓、今何歳」

「17」

部屋の電気を消してベッドに横になっていたところに莓の来訪。というか、ほぼ毎日。

とくに許可もだしてないのにいそいそと、莓はベッドにもぐりこんでくる。

「へへへ、あつたかい」

莓がもぐりこんだベッドは、体温がこもりだして私一人の時と比べてだいぶ温い。

「臯月ねえあつたかい」

ベッドの中、莓がいつものように抱きついてくる。冬場、これらの時期は生きたカイロとして結構重宝してる。

「おやすみー」

「おやすみ」

最近朝方がかなり冷えてる時がある。朝起きて体が冷えてました、にならなによう生きたカイロをしっかりと抱きよせて眠った。

「……あつたかい」

今年の冬も、莓は重宝しそうだ。

(後書き)

これも部活です。

テーマは……そう、四季だったんですよ。

ということはあと2編あります。夏と春。順番にすればよかったんですが、まあ、こんなことを想う頃にはもう、秋を投稿してたんで手遅れなんです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6966o/>

---

Winter Fall

2010年11月4日01時25分発行